

アマチュア 『疑心暗鬼』

プロとアマチュアの違いは、
自然を見方に付けたか、敵にまわしたか。

パリューゴルフ
VALUE GOLF
www.valuegolf.co.jp

猛暑とゴルフ

地球温暖化による異常気象が続いている。という聞き慣れた話はさておいて、日本の、とりわけ内陸部に位置するゴルフ場の温度も、湿度も、炎天下で数時間プレーする競技は体に与える影響は甚大である。

サッカーの話になるが、埼玉県シニアサッカー連盟では、全国で初めて熱中症対策で試合の変更をした。これに合わせてJFA（日本サッカー協会）が47都道府県の協会に対して、炎天下での試合の運営に関して、指導要項を発表した。

そして、夏の全国高校野球。甲子園球場で、若い肉体をぶつけ合うのが健康的というような古い価値観もあるが、実際には、選手の体の免疫力は低下し、決して健康的とは思えないのである。昨年から熱中症の症状を訴える選手が出たこともあり、5回終了後に最大10分の休息がとれる「クーリングタイム」が導入された。さらに、今年からは新たな暑さ対策として、気温が上がる時間帯を避けて午前と夕方に分けて試合を行う2部制を開幕から3日間に限って導入することとなったようだ。

さて、ゴルフに関して言うと、基本的には春から始まり、秋まで続く年間試合のスケジュールだが、比較的季節の流れや、天候や温度を意識しながらトーナメントスケジュールが組まれている。ところが、昨今の天気は、札幌の湿度が沖縄の那覇を上回ったり、高原のゴルフ場の湿度が80%を超えたりと、日本列島を襲う熱帯性低気圧が、どこの地方も変わりなく、全体的に覆いかぶさっている。女子の3日間の競技、男子の4日間の競技は、特に決勝ラウンドで選手の疲労がピークとなる。体温が上昇したまま、睡眠をとると免疫力が下がり、クーラーの関係で夏風邪を引きやすくなったり、食欲不振に陥ったり、日頃鍛えた彼らの肉体にも、大変な負担がかかるのだ。

この50年間、プロゴルファーの活躍とともに、道具も進化し、今やゴルフは大衆スポーツとなった。老若男女、誰しも簡単にプレーできるスポーツであるが、炎天下で4時間、5時間かけて球を打つスポーツは意外と少ない。それだけに、業界を挙げて猛暑に対するキャンペーンを行う時期が来たのかもしれない。何年後かのゴルフスタイルを考えると、春と秋がなくなったという日本において、特に7、8月の夏場でアスリートが心地よく実力を発揮するのは、なかなか難しい。炎天下を避け、アーリーバードや薄暮プレーが一般的になるのではないだろうか。



戸張 捷 Sho Tobari

1945年、東京生まれ。高校からゴルフを始め、3年で全日本ジュニア3位、大学4年で日本アマ9位。住友ゴム工業（現SRIスポーツ）に入社後、株式会社ダンロップスポーツエンタープライズへ出向。トーナメントディレクター、プロデューサーとして日本ゴルフ界に貢献した。現在は、ゴルフキャスターとして活躍するほか、ゴルフトーナメントやイベントのプロデューサー、コンサルティングなども手掛けている。